ふるさと歴史民俗散歩

第13回

豊年感謝の祭り　えびす講

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問　柏村　祐司

恵比寿講は、恵比須・大黒の福の神に豊作の感謝をする家の祭りで、もともと旧暦十月二十日に行われた。「講」という言葉は、神仏を信仰する集団をいい、恵比須講は、江戸の商人等が旧暦十月二十日に集まり、恵比須・大黒天を祭り商売繁盛を祈願および感謝するとともに酒宴を行ったことに由来する。これがやがて一般家庭等に広まり、家の祭りになってもそのまま恵比須講の呼び名が用いられたのである。一般にはエビスコ、あるいはエビスッコ等といわれ、また、暦の改正により新暦十月二十日に行う所が多い。

恵比寿講の供物

恵比須講は、一月二十日にも行われる。宇都宮辺りでは、春の恵比須講に恵比須様が出稼ぎに出かけ、秋の恵比須講に帰ってくるという言い伝えがある。したがって秋の恵比須講には沢山の供物を供え、収穫や商売繁盛を祝うのが特徴となっている。

恵比須講の祭りは、夕方行われる。普段、神棚に祭っている恵比須・大黒様をおろして、机やチャブ台の上に安置し、その前にさまざまな供物を供えて祭る。一般的な供物は、新米で炊いた米の飯や赤飯に、あるいは新蕎麦粉で打った蕎麦、けんちん汁、それに尾頭付きの魚である。米の飯、赤飯、蕎麦等は、収穫の祭りに相応しく、いずれも椀に山盛りにする習わしがある。尾頭付きの魚では、サンマの場合が多いが、お大尽様では大きな鯛を供える家もある。これらの他に、ドンぶりに入れた生きた小魚やソロバン、財布等を供える家も多い。ドンぶりに入れた小魚をカケブナともいい、小川で捕ってきたフナやウグイ等を供える。この日の夕食は、家族そろって恵比須・大黒様に供えものと同じ食べ物をいただく。食事が一段落すると恵比須・大黒様に供えた物を「家の主等が「何万両で買います」等と、景気の良い言葉を述べて下げ、その後供物の御馳走を家族で分け合いいただいたものである。

こうした各家の恵比須講の祭りに対し、肥料屋では、秋の恵比須講には、お得意の農家を招いて盛大に恵比須講の祭りを行ったものである。農家では春先、農作業が始まる前に肥料を購入し、支払いは秋の収入れが終わり現金収入を得てからという場合が多い。肥料屋では支払いが無事なされるように、恵比須講に招待し酒肴を振る舞ったものである。こうした支払いの風習をエビスコ勘定といった。ともあれ大きな肥料屋ともなれば、秋の恵比寿講は一日中農家の人たちで賑わい、多忙を極めた。

近年、宇都宮辺りでは恵比須講の祭りを行う家が少なくなった。生活の変化や人々の信仰心の衰退等が背景にある。ところで、十月は神無月ともいわれ、村の神々が出雲の国に出かけ不在となる月である。ところが恵比須・大黒天は、どこにも出かけずにしっかりと家を守ってくれている。恵比須・大黒天は、庶民に厚く信仰されてきたところから、家にとりつき家から離れられない神様ともされた。いうなれば十月二十日の恵比寿講は、村の神々の留守を預かる恵比須・大黒天を慰労する意味合いもあった。近年の恵比須講の衰退に対し、恵比須・大黒様は、どう思っているだろうか。果たして留守番をしっかりしていただけているだろうか。少々心配でもある。

恵比寿講の祭り